壽府の世界宗教大會に出席して

東京文理科大學教授　友枝高彦

一

私が今回渡歐した用務は、第一に神道家の一人として宗教會議に參列すること、第二に日獨兩國の文化交換事業計畫に參畫することの二つを兼ねたものであつた。私は今日特に神道を研究してゐる者ではないが、父は數十年間神道に力を盡し又書いたものも多少遺してゐて、神道は家の敎になつてゐるばかりか、私自身も神道の方面に或る考へを持つてゐるので、旁々此の重大な使命を受けたのであつた。

今回催された世界宗敎會議は、本來一九二〇年に開かるべきものであつた。其の成立ちを云ふと、これは米國のチャーチ、ピース、ユニオンが一九一四年にカーネギーから寄附金を受けて、世界の各宗敎家が打寄つて平和の爲に貢献しようと云ふ趣意で計畫せられたものである。ところが其の一九二〇年といふ年は世界戰爭の始まつた年であつたので、開催の機會を失し、爾來延引してゐたのを、今度は是非開

かうと云ふので、取敢ず其の準備會をジュネーブで開いたのである。

何せよ最初の會合、殊に準備會であつたから、集まつた者は比較的少數であつたが、それでも人數に於ては百四五十人、宗教としては佛教・基督教・孔子教・ヒンヅー教・マホメット教・猶太教・ゾロアスター教・神道其の他で十一教に上つた。今までストックホルム其の他で基督教の聯合會が開かれても、舊教の人は殆ど出席しなかつたのに、今度は舊教も參加した。これは實に特筆すべき事で、從來他宗と共同することを嫌つた舊教が進んで參加したのは、會の趣意が世界の平和に貢献するにあつて、各宗各派の優劣長短を論ずる爲でなかつたからにも因らうが、其の寧ろ意外な參加は確に主催者を喜ばせた。

各宗の代表者は九月の十二日から十四日までジュネーブのアテーナ美術館に集まつて會議を開いたが、其の間に國際聯盟の總會が併行して開かれてゐたので、私は之をも傍聽した。國際聯盟と宗教會議とは表面何等の關係がないやうであるが、私は聯盟總會を傍聽してゐるうちに此の二つは密接不離の關係にあることを痛感した。聯盟總會は聯盟加入國の代表者が集まつて、世界の政治・經濟・教育其他について意見を闘はす會議であるが、其の總會の演說、理事會、小委員會の討論に現れてゐる各國の主張を見ると、歐洲諸國の間では相互の利害に基く感情が如何に錯綜し、衝突してゐるかゞ分る。即ち是等會議の席上で諸國の代表者は各自其の不平を曝け出してゐるのであるが、其の不平には宗教上の不平も政治上

の不平もある中に、殊に最も痛切に訴へられ、又高度の同情を以て視られ、なほ又甚だ解決の困難なる重大事案と感ぜられてゐるのは、大國の間に介在してゐる幾多の少數民族の問題である。最近のジュネーブの俚諺に、「國際聯盟の良心はスカンヂナビアにあり」と云ふのがあるが、これは少數民族の代表者が正義を主張すると云ふ意味である。

事實、少數民族代表者の主張は何れも頗る熱烈なもので、ハンガリーの代表者の如きは、當年八十幾歳の老人であるが、實に壯者を凌ぐ熱辯でルマーニアの壓迫を訴へた。其の他バルチック系のリトワニア・エストニア國、又、諾威・瑞典等の代表者は、種々の問題を提示して、熱烈な要求をしたが、それ等は概ね教育・信仰の問題に關するものであつた。尤も數から云へば全歐洲の人口は約四億七千萬ある中で、少數民族は僅に四千萬であるから、特に重大視するには足らぬやうであるが、此の四千萬の少數民族は廣く各國に分布して繋がりを持つてゐるから、常に歐洲政界に於ける重大問題の淵叢を成してゐて、政情の困難・國交の危機は、必ず此處に胚胎する、而も此の少數民族が就中最も熱烈に主張するのは、其の教育・宗教の問題、即ち文化の問題であるから、今や國際聯盟に於ての最も重大な問題はと云へば、それは少數民族の文化問題である。だから世界宗教會議と國際聯盟總會とは、極めて緣の近いもので、今日世界の政治を理會せんとするには、世界の宗教についても多少進んだ觀察をする必要がある。

二

世界宗教會議は以上の如き意味に於て、世界的に頗る重要な催しであるが、抑も此の會議が發企された動機は、東方の諸國の宗教が興へたものだと云はれてゐる。

印度には今日多くの宗教があつて互ひに相爭つてゐるが、其の爭ひたるや實に、他國には見られぬ烈しいもので、それが爲に所詮印度の獨立は夢であると云はれる程までに複雜した鬪爭が絶えず反復せられてゐるのである。又更に波斯（小アジアから東の部分）を見ると、其の民族が複雜である如く、信仰問題も複雜を極めて居て、これ亦甚だ解決の困難な狀況にある。そこで歐羅巴の東、亞細亞の西に於ける是等の國々の宗教問題は、世界の人道問題として等閑には附せられない、何とか互に打明け話をして緩和策を講ぜねばならぬ、それには異つた宗教の人々が集まつて意見の交換をするのがよからうと云ふのが、一部の動機となつて、遂に今回の宗教會議は開かれたのである。

よく世間では國際會議といふものは餘り大した效果がない、國際聯盟の如きも只英佛二國が活躍するばかりで他の諸國は存在をも認められない、其の他の國際會議でも、或る一二の國の勝手が行はれるのみであると稱して、此の種の會合を輕んずる者もあるが、私は必ずしもさうは思はない。既に私が國際聯盟總會の實情について述べたやうに、今日世界の形勢は世界の輿論即ち多數の意見が重きを成してゐ

る狀態にあつて、凡ての問題は之を世界公衆の前に曝け出して、其の是非善惡の判斷を輿論に求めることに成つてゐるから、强國と雖も妄に他の要求を無視することは許されない。だから其の主張が國際正義に合致すれば、小國の主張と雖も立派に通り得るのであつて、私は此の意味に於て國際聯盟其他の國際會議にも存在の意義があると思ふ。

三

宗教會議の席上では各宗教の代表者が何れも各自の立場から種々の主張をしたのを興味を以て聽いたが、東洋方面殊に支那・日本に就ていふと、支那の道教からは出席者がなく、孔子教の代表者としては北平で教會並に學校を建設して實地の教導に當つてゐる熱心な人が出た。日本側では神道の代表者として私、佛教の代表者としては慶應義塾大學からハイデルベルヒへ行つてゐる淨土宗の人、基督教からは石田友治君などが出て、總計六人が參列した。私は最初の發會當日には、此の宗教會議の議長に傳達する日本宗教大會の決議文を齎して行つた關係上、神道の代表者といふよりも寧ろ日本の代表といふ意味で一般的な挨拶をしたが、其の翌日、此の會議の一般的使命並に目的に關する委員會が催された後に至つて、特に神道に關する意見を述べた。しかし一概に神道といつても、教派として十三の種別があり、其の外になほ神社神道・國體神道もあるから、之を總括して述べるのは容易でない。そこで甚だ漠然たる

ものにはなつたが、日本神道の道德的意義から觀て抽象的に話した。即ち先づ最初に、日本人が往々世界に誤解されるのは、語學上の困難がある爲、退いて沈默の安全を守るからである、しかし日本人は決して祕密を好む國民ではない、又一部には日本の文明は模倣の文明であるといふが、今日日本が世界の文明國として五大强國の班に列し得たのは、根本に於て固有の文明があり、獨創的な精神を持つてゐるからである、而して此の一種獨特の精神生活を今日までに營んで來た中心觀念は神道であるといふ點を說述し、此の神道は日本開闢の始から存在した、或は神道には敎理・敎典が無いと云ふ者もあるが、神の行爲は日本の歷史の上に明らかに記錄されてゐる、これが何よりの敎典であると主張し、佛敎及び儒敎の輸入に際して日本の採つた態度を述べて、近く歐洲文明が輸入された時も之と同じであることを說き、これは天祖の御神德が包容的な國民精神となつて發露したのであらうと云つた後に、日本の神道に於て最も重大な德は淸明心であることに說及び、次いで、神道の哲學に於ては、凡ての人類は全宇宙の根元たる天御中主神に歸一すると觀てゐるのであつて、日本人は此の神に生命の最高を認める、而して此の全宇宙の根源に感謝を捧げるといふ處に、所謂報本反始の原理が立つ、日本人の祖先崇拜は此の原理の一般的な言ひ現しであるとし、なほ次に日本では家長は祖先の代表者と考へられる事を引例して、曾ては一人の家長の下に大家族が率ゐられてゐた事から、神宮と神社との關係に說及び、更に罪の考へ

に轉じて、日本には原罪なるものはない、只忌み嫌はれるのは清明心に對する不純な心である、だから強ひて罪の觀念を求めるならば、それは生に對する闇黑がそれであらう、又日本人には憎惡・排他の觀念がない、故に妄に腕力に訴へることをせず、廣々とした包容的な精神を以て他に對する、宗教信仰に於ても其の通りであると述べ、こゝで國體中心の神道と其他の神道との區別について話して、現在日本に行はれてゐる諸宗教を說いた。

固よりこれは私一個の見解であるから種々の異論もあらうが、此の話をした爲に、或る印度人から日本の古典を敎へよと迫られ、其他二三十年前に西藏を探檢した一英人からも熱心に面會を求められた。

斯くて會議は三日間を以て終つたが、次の會議は東方に開くがよからうといふ事で、色々の候補地が議に上つた。私は日本を主張して置いたが、しかし明年は困難であらうと云つた。そこで孟買とかカルカッタとか諸所が問題となつたが、贊否交々で結局纏まらなかつた。

此の三日間の會議中で、第二日目の朝にニューヨークのヒューム敎授が共通の祈といふ詩を示した。それは世界の各宗敎の敎典の中から色々の代表的文句を集めたもので、會議の時に司會者がそれを唱へると、會衆全體が唱和する事にしたいと云ふのであつたが、餘りに一宗敎に偏したものであるといふ非難が出て、これ亦纏まりを見なかつた。

斯ういふ風で格別纏まつた事はなかつたが、平和といふ事については固より共通であるから、一つの決議文が出來て、それをメッセージとして發表しようといふ事になつた。此の種の準備委員會は、なほ引續いて行はれる事になつてゐるが、兎角に米國人の考へは動機は善いが、同時に又何事でも容易に行はれると輕信する傾きがあるのは宜しくないと思ふ。それは此の宗教會議についても言はれる事であるが、世界の宗教者の立場を互に接近せしめて平和に解決させようとする米國人の努力は十分察せねばならぬと共に、日本人としては、斯かる機會に我々日本の立場を外國人に知らせることが必要である。

それについて切實に考へられるのは、日本の神道に關する文獻の外國に紹介せられてゐるものが餘りに少いことである、日本の眞實相を外國に知らしめる爲には先づ此の點に大なる盡力をして、我國固有の思想、固有の文化を宣揚せねばならぬのに、それが今までには案外忽諸に附せられてゐたのは遺憾である。私は例の今一方の要務である日獨文化交換事業について、諸方の大學に行つたが、何れも皆日本學の講座を開くことを熱心に希望してゐて、只經費のないのを歎いてゐる狀態であつた。ハンブルヒあたりでは近く神道講座を開くといふので携帶してゐた教科書を寄附して來たが、大層喜ばれた。私は日本人が、此の盛なる外國人の要求の機運を空しく看過せず、凡ての方面に於て日本を紹介することに、盡力あらんことを茲に繰返して希望する者である（文責、溝口生）